

令和元年5月29日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02892

研究課題名(和文) 中国の渤海史研究草創期についての史学史的研究 金毓黻を中心に

研究課題名(英文) The Studies on early days of Bohai history studies in China from the viewpoint of history of historical studies: Focusing on the historical studies of Jin Yufu.

研究代表者

古畑 徹 (FURUHATA, Toru)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：80199439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：金毓黻の『渤海國志長編』は、満洲事変で軟禁中の1931年11月に執筆を開始し、解放された12月に大体を書き上げたが、初稿は1932年1月に完成し、改稿・増補を経て、1934年5月に刊行された。彼は渤海領域図に旧地名を入れ、満洲国否定の意思を明確にしたが、その説明をする「叙例」を1931年12月作成と記し、日本側に真意を悟られないようにした。当時の彼の満洲国否定意識は、愛国より愛郷によるもので、彼には中国東北を蔑ろにしてきた中央への批判意識もあった。日本批判とは裏腹に、日本人研究者と密接に交流しており、亡命後も相互に尊敬しあう姿も確認できた。そこには現在の論争を解くヒントを見ることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、現在の中国における渤海史研究の原点が1930年代の草創期にあるとの理解のもと、それをリードした金毓黻を中心に、渤海史研究と当時の「満州」をめぐる政治情勢や中国ナショナリズムの動向との関係を史学史的に明らかにし、渤海史研究の停滞状況克服への道筋をつけ、日中の歴史学界の議論を噛み合わせる土台を形成して、研究の新たな地平を開拓することである。研究成果として、従来の中国側認識よりも複雑な金毓黻の事情と、国家間の対立を超えた研究者間の交流と相互理解の様相が確認できた。この事実は、渤海史研究のみならず、立場の違う研究者同士の学術交流のあり方にヒントを与えるものといえる。

研究成果の概要(英文)：“Bohaiguozhichangbian” written by Jin Yuhu began writing in November 1931 when he was placed under house arrest by Japanese army in the Manchurian Incident and was mostly written up in December 1931 when he was released. After that, the first draft of this book was completed in January 1932, the final draft was published in May 1934. He expressed he gave a denial to the Manchu Empire by putting the pre-Manchu-Empire place name in the Bohai territory map, and he wrote the fictional date of "Preface and Legend" as December 1931 writing, as Japanese failed to notice his real intention. His denial of Manchu Empire was by localism rather than nationalism at that time. He was in close contact with Japanese researchers, contrary to his sense of criticism towards Japan, and he and Japanese researchers respected each other even after he was exiled to China. We can find tips to overcome the controversy about Bohai's belonging in their friendships.

研究分野：東アジア史

キーワード：渤海 金毓黻 史学史 中国東北 マンチュリア 東北アジア 静晤室日記 満州事変

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 中国東北地方・朝鮮半島北部・ロシア沿海地方にまたがって存在した渤海(698～926)は、高句麗人と各種靺鞨人らによって構成された多民族国家である。滅亡後の渤海遺民は、朝鮮半島に亡命した者、中国東北地方南部に強制移住させられた者、その地に留まった者など多様で、その子孫は現在の韓国・朝鮮人の一部、満族などの中国東北地方の少数民族、ロシア沿海地方の少数民族、さらには漢族の一部にもなっている。このように、渤海は領域・構成民族・遺民などが現在の国家・民族に跨がる、国民国家の枠組みでは把握しきれない存在であり、それを前提とした一国史観的歴史理解ではその実像に迫りえない存在である。しかしながら、現実には渤海の現在の国家・民族への「帰属問題」が存在し、中国と北朝鮮の間では1960年代から、中国と韓国の間では1980年代から「帰属問題」が議論となってきた。2002年に発生した「高句麗歴史論争」でも争点となり、多くの論著・シンポジウムが生み出されて、一見すると研究が活性化したようだが、一方で中国・韓国における渤海史解釈の枠組が固定化し、研究はその枠組を逸脱できなくなってしまう。渤海史研究の進展を促したその政治性が今や学術研究の阻害・停滞要因に転化してしまっている。

(2) 研究代表者は、平成23年度の基盤研究(C)に「高句麗・渤海をめぐる中国・韓国の「歴史論争」克服のための基礎的研究」が採択され、この問題を掘り下げてきた。そこで明らかになってきたのが、渤海史をめぐる論争の争点の大半が1930年代の渤海史研究草創期にすでに揃っていたことであり、それが日本の「満州」侵略と直接的な関係にあるということである。特に、中国における渤海史研究のパイオニアである金毓黻(1887-1962)は、中国東北地方の有力官僚でもあり、満州事変の際に幽閉されたことがその名著『渤海国志長編』の執筆動機となったとされる。彼は中国で高く評価され、顕彰的な論稿は多数あるが、客観的に分析したものはほとんどなく、中国の渤海史研究を正確に理解・分析する際のネックになっている。幸いにして彼の日記(『静晤室日記』)が残されており、また、『渤海国志長編』の初版も現存しているから、これらを手がかりにすれば、客観的な分析が可能な状況にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、最近の中国東北古代史に対する史学史的な研究の進展を踏まえ、現在の中国における渤海史研究の原点が1930年代の草創期にあるとの理解のもと、それをリードした金毓黻を中心に、渤海史研究と当時の「満州」をめぐる政治情勢や中国ナショナリズムの動向との関係を史学史的に明らかにし、渤海史研究の停滞状況克服への道筋をつけ、日中の歴史学界の議論を噛み合わせる土台を形成して、研究の新たな地平を開拓することである。

3. 研究の方法

(1) 1930年代前後の金毓黻の渤海史研究と当時の「満州」をめぐる政治情勢や中国ナショナリズムの動向との関係を、史学史的に明らかにするために、『静晤室日記』等による金毓黻の渤海史研究の経緯の正確な跡付け、『静晤室日記』及び「満州」関係の中国・日本の諸史料による金毓黻の人間関係の正確な跡付け、1930年代前後における中国東北地方への中国歴史学界の問題関心の変化の正確な跡付け、という3つの基礎作業が必要である。また、日中の歴史学界の議論をかみ合わせるために、現在の中国における渤海史研究の動向の正確な跡付けという基礎作業と、1930年代前後の「満州」をめぐる政治情勢との関係及び中国ナショナリズムの動向との関係の史学史的考察、金毓黻の影響を中心とした中国の渤海史理解の特質の明確化と日中の渤海史研究の議論が噛み合うような問題の立て方の検討という検討作業が必要である。

(2) 研究代表者および研究分担者・連携研究者が基礎作業および検討作業の基礎調査を分担し、研究会にてその成果を報告・共有しながら、2つの検討作業をおこなう

4. 研究成果

(1) 1930年代前後の金毓黻の渤海史研究と当時の「満州」をめぐる政治情勢や中国ナショナリズムの動向との関係についての最も重要な研究成果は、『静晤室日記』の記述と『渤海国志長編要刪』及び『渤海国志長編』初版の比較検討から『渤海国志長編』の成立過程を明らかにしたことである。そこで明瞭になったのは次の5点である。

『渤海国志長編』成立過程の正確な事実関係は、金毓黻が満洲事変で軟禁中の1931年11月に執筆を開始し、解放された12月に「大体」を書き上げ、1932年1月に初稿完成、二稿完成は同年4月、三稿完成は同年12月で、さらに1933年8月から刊行作業に入り、1934年5月刊行、である。

『渤海国志長編』は、日本人研究者の協力によって完成したので、金毓黻はその研究を高く評価し、彼らに敬意・感謝の念を持っていた。

金毓黻は『渤海国志長編』を伝統的な中国史書の体裁とすることにこだわったが、それは金・清という中国東北史の流れのなかに渤海を位置づけようとしたためである。

境域地図の現在地名に満洲国以前の地名を使っていることから、金毓黻が『渤海国志長編』に満洲国否定の気持ちを込めていたことは明らかである。しかし、それが一般にはわからな

いようにするため、「叙例」執筆時期を事実とは異なる 1931 年 12 月に変更し、地図の成立を満洲国成立前に見せかけた。あえて「叙例」の執筆時期を 1931 年 12 月としたのは、本書が満洲国事変における軟禁によって発憤した結果であることを、事情を知る者だけに知ってほしかったからである。

金毓黻には、渤海を唐の一地方民族政権とする意識はなく、彼の満洲国否定の背景には「愛国」より「愛郷」の意識の方が強かった。

- (2) (1)からすると、『渤海国志長編』執筆前後の金毓黻には、満洲事変まで中国東北の歴史を等閑視してきた中国中央の学界への批判的な視線、郷土への強い愛情とそれを蹂躪した日本への強い拒絶意識、その一方で日本人研究者との強いつながりなどがあり、当時の中国人学者のナショナリズム的動向とは一線を画しており、現在の中国での研究のように、彼を単にナショナリストとみなすのは正確な理解とはいえない。彼の著作の愛国的傾向は、1936 年の亡命後になって強くなると考えられる。
- (3) 亡命後の金毓黻は日本の研究への批判は行いが、日本人研究者個人を非難する文章を残しておらず、日本人研究者も、亡命後でも金毓黻を個人的に非難することはなく、その研究を引用しつつしていることが判明した。この両者の関係には、渤海史をめぐる現在の膠着的状況を打開するヒントがあると考えられる。
- (4) (1)の研究過程で、『渤海国志長編』の出版予告冊子である『渤海国志長編要刪』を金毓黻が日本側との人脈づくりに活用していた事実が明らかとなり、彼の行動をより正確に理解するためには本書の所在とその収蔵経緯を調査する必要があることが明らかとなった。現在、7 機関の所蔵が確認され、収蔵経緯も一部わかってきている。
- (5) 現在の中国の最新の渤海史研究事情を現地調査した結果、渤海の「旧国」(最初の都)所在地を敦化とする定説に疑問が持たれるようになってきており、考古学を中心に新たな候補地を探る調査が進んできていること、渤海を靺鞨との関係だけで捉える公的見解の縛りも従来ほどは厳しくなく、渤海については比較的自由な議論が可能な状況になっていること、中国東北では依然として金毓黻への関心が高く、日記の影印版を含む著作集刊行の動きがあること、などが判明した。
- (6) 渤海のように、現在の国民国家の枠組みを跨ぐ前近代の国家を歴史的に位置付けるには広域史が有効だとされ、かねてより渤海は東アジア史や東北アジア史のなかで位置付けることの有効性が確認されてきた。本研究では、これらに加えて、近年盛んになってきている東部ユーラシア史という枠組みのなかに渤海を位置づける試みが行われ、それによって従来とは異なる、遊牧勢力との深いつながりを持った渤海像が提示できることを明らかにした。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計9件)

古市 大輔、清代後期の永陵正白旗満洲喜塔臘氏に関する初歩的考察 清代盛京旗人官僚家族史研究のための基礎作業の一環として、金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇、査読無、11 巻、2019、pp.1-36

<https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/>(現在掲載作業中)

古畑 徹、金毓黻『渤海国志長編』の成立過程、東洋史研究、査読有、76 巻 2 号、2017、pp.72-104

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/>(現在掲載作業中)

古畑 徹、『日本渤海関係史の研究』の評価をめぐって 渤海史・朝鮮史の視点から、アジア遊学、査読無、214 号(石井正敏の歴史学)、2017、pp.89-97

オープンアクセスが困難

古市 大輔、盛京旗人としての文祥と清代後期の瀋陽正紅旗満洲瓜爾佳氏 主として『文忠公自訂年譜』・同年齒録からみたその家族構成に関する粗描、金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇、査読無、10 巻、2018、pp.1-32

<https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/>(現在掲載作業中)

古市 大輔、崇實の二子とその妻・姻族について 同年齒録にみる清代完顔氏の姻戚関係の一齣、金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇、査読無、9 巻、2017、pp.1-14

<https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/>(現在掲載作業中)

古畑 徹、張建章墓誌と『渤海国記』に関する若干の問題、東北大学東洋史論集、査読無、12 号、2016、pp.133-155

<https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/>(現在掲載作業中)

[学会発表](計16件)

古畑 徹、『渤海国志長編要刪』及び『静晤室日記』調査報告、第4回金毓黻と東北アジア史研究会、2019

古畑 徹、東部ユーラシア史という考え方 近年の日本における古代東アジア史研究の新動向、国際ワークショップ「古代東亜的交流と互動」(中国南開大学主催)、2018

古畑 徹、日本の渤海史研究の現状について、長春師範大学東北亜歴史与文化研究学術講座、2018

古畑 徹、日本の高句麗・渤海研究の現状について、延辺大学高句麗・渤海研究センター学術講演会、2018

古畑 徹、金毓黻『渤海国志長編要刪』について、第3回金毓黻と東北アジア史研究会、2018

古畑 徹、渤海王家の系図について 石井正敏氏の考証方法をめぐって、第2回金毓黻と東北アジア史研究会、2017

古畑 徹、金毓黻『渤海国志長編』の成立過程について、平成27年度東洋史研究会大会、2015

小林 信介、恐慌下社会運動の展開と満洲移民の送出、日本植民地研究会、2015

〔図書〕(計2件)

小林 信介 他、岩波書店、日本植民地研究の論点、2018、320

古畑 徹、吉川弘文館、渤海国とは何か、2018、240

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：古市 大輔

ローマ字氏名：(FURUICHI, Daisuke)

所属研究機関名：金沢大学

部局名：歴史言語文化学系

職名：教授

研究者番号(8桁)：40293328

研究分担者氏名：小林 信介

ローマ字氏名：(KOBAYASHI, Shinsuke)

所属研究機関名：金沢大学

部局名：経済学経営学系

職名：准教授

研究者番号(8桁): 50422655

(2)研究協力者

研究協力者氏名：小嶋 芳孝

ローマ字氏名：(KOJIMA, Yoshitaka)

研究協力者氏名：井上 直樹

ローマ字氏名：(INOUE, Naoki)

研究協力者氏名：赤羽目 匡由

ローマ字氏名：(AKABAME, Masayoshi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。